

自己隠蔽気質とパワーポーズの関係性についての研究

川崎 万里奈 (岡山大学)

1. 目的

本研究では、身体と心の関係に着目し、身体的な開閉と心情的な開閉との関連に焦点を当て、その運動性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

身体 の 指 標 に Power pose (Carney et al, 2010)、心の指標に日本語版自己隠蔽尺度(河野, 2000)を用い、質問紙調査(性別、年齢、身長・体重、中学・高等学校での部活動、自分の姿勢や体型についてどう思うかの記述、日本語版自己隠蔽尺度、Power pose (High/Low) 写真選択5問)を実施した。

1) 対象者: O 大学に在籍する 538 名

2) 調査時期: 2019 年 4 月~6 月

3) 分析方法

・ Power pose 選択、または自己隠蔽得点のそれぞれにおいて、調査対象者の基本的属性(性別、部活動、身体表現系部活動の経験有無)による差があるか t 検定。

・ Power pose 選択と自己隠蔽得点とで Pearson の相関分析。

・ 自己隠蔽得点を 3 群に分け Power pose 選択の差を見る一元配置分散分析。

3. 結果と考察

1) Power pose 選択について

性別においては有意差が見られ、男性が High を、女性が Low power pose を多く選択していた。部活動(中学・高校)においても有意差が見られ、運動部が High を、それ以外の方が Low power pose を多く選択していた。これらはどちらも Amy Cuddy (2012) を支持する結果となった。さらに、身体表現系部活動の経験有無においても差が見られ、経験者が Low を、未経験者が High power pose を多く選択していた。これらは新たな発見といえる。

2) 自己隠蔽得点について

性別、部活動どちらにおいても有意差は見ら

れなかった。身体表現系部活動の経験有無においては有意差が見られ、経験者の自己隠蔽が高く、未経験者が低かった。これらは新たな発見といえる。

3) Power pose 選択と自己隠蔽得点の相関分析

High/Low power pose、どちらも自己隠蔽得点と弱い相関関係が見られ、High power pose と自己隠蔽では弱い負の相関、Low power pose と自己隠蔽得点では弱い正の相関が見られた ($p < 0.01^{**}$)。つまり、自己隠蔽得点が高い人は High を、自己隠蔽得点が高い人は Low power pose を多く選んでいた。

4) 自己隠蔽得点 3 群間の Power pose 選択

自己隠蔽得点 (12~60 点) を 3 群 (低群・中群・高群) に分け分析した結果、High/Low power pose 選択どちらにおいても低群と高群の間に有意差が見られ ($p < 0.05^*$)、低群が High を、高群が Low power pose を多く選択していた。

4. 結論

本研究の結果より、Power pose と自己隠蔽の関連は弱い相関関係ということにとどまったものの、自己隠蔽が低い人は High を、自己隠蔽が高い人は Low power pose を多く選ぶことが明らかとなった。つまり、自分の否定的・嫌悪的情報を隠したいと思う人は身体的にも同じように縮こまる動きを行い、隠そうとしない人は身体も開く動きをするということが示された。

5. 主な引用参考文献

1) Carney, D.R., Cuddy, A.J., & Yap, A.J. (2010) Power posing : brief nonverbal displays affect neuroendocrine levels and risk tolerance . Psychological Science, 21(10), 1363-1368

2) 河野和明 (2000) 自己隠蔽尺度 (Self-Concealment Scale) ・ 刺激希求尺度 ・ 自覚的身体症状の関係. 実験社会心理学研究 40 : 115-121

3) Cuddy, A. (2012) Your body language shapes who you are. TED https://www.ted.com/talks/amy_cuddy_your_body_language_shapes_who_you_are